

— 瑠璃色の月夜 —

その日はまるで、夜空が瑠璃色に見える程、
明るい満月が京都の町々を照らしていた。

「……あれ？ ラピちゃん？」

町の要所『花の御所』に住む友達を尋ねた
帰りの、帽子のよく似合う少年は。

町を流れる小川の、小さな橋の上に佇む、
よく連絡を取り合う友人……瑠璃色の髪で、
深く青い目をした少女が、笑って少年に手を
振っていることに気が付いた。

「ただいま。くーちゃん」

元々旅がちであり、少し前から、京都より
少し南にある自宅を空けていた少女の帰りに、
少年は明るい顔をして橋まで駆けよる。

「元氣してたー？ どーしたの、こんな夜に」
「うん。帰ったばかりなんだけど、またすぐ
出る事になったから、急いで来たんだあ」

「え？ そーなの？」

それはさすがにあまりに忙しなないと、少年は
不思議そうにする。

「それだったら、蒼ちゃん達にも会わないで
いーの？ 良かったら御所まで一緒に行くよ」
道順からは少女はまだそこには行っていない
はずであり、夜道を一人で歩かせるわけには
いかぬと少年が明るく笑う。

「ううん、くーちゃんきつと、御所から出て
きたばかりでしょ？ 一度手間だからいいよ」
「ええー。先に伝話くれたら、蒼ちゃん達も
連れて出て来たのにー」

「それがねえ、ひどいんだよ。ユーオンが
私のPHS、壊しちゃったんだあ」

「ええ！？ ホントに！？」
少女の常々優しい義理の兄の、突拍子も無い
行動を、少女は楽しみに口にしていた。

「慣れない物触るからいけないんだよねえ。
仕方ないから、こーやって直接来たんだよ」
「そーだったんだ……ビックリだねー」

そこで少女は、少しだけ残念そうな顔で、

まだ驚きの顔をしている少年に笑いかける。

「でもそれで良かったかも。今度から行く所、

絶対伝波入らないとこなんだ」

「ええー。じゃあ新しいPHS、しばらくは

買わないの？」

「うん。魔界のおかーさんの所で暮らす事になつたから、次はいつ帰れるかわかんないし」

「へ？ マ……カイ？」

少女がさらりと口にした単語を、あまり理解

出来なかった少年は目を丸くする。なので、

理解出来た範囲で少女に返答した少年だった。

「ラピちゃん、お母さんの所にいくの？」

「そーなの。ユーオンもだけど、ユーオンや

おとーさんはこっちにも帰ってくると思う」

しかし少女は母の元に落ち着くと、いつもは

明るい笑顔の少女が、珍しく少し苦笑う。

「おかーさん、向こうの仕事が大変みたいで、

どうしても帰れないって言うから、それなら

私が向こうに行くこうって思ってたさ」

「そっかー……ラピちゃん、お母さんのこと

大好きだもんねー」

それは仕方ないねと少年は寂しげに笑った。

「残念だなー。ラピちゃんに当分会えない上、

伝話も出来ないなんて」

「本当、私もくーちゃんと話せないのが一番

淋しいよ。……あ、でもね——」

何かを思い出したように少女は顔を上げ、

「私の妹が今度、代りにここで住むんだあ」

「え？ ラピちゃん、妹さんがいたの？」

うんと、とても幸せそうにそこで微笑んだ。

「蒼潤君や鶴ちゃん達にもよろしくね」

「わかった、言っとくよ。でも帰った時には

寄ってね、また遊ぼーね！」

「うん。ありがと——くーちゃん」

そうしてあっさり、少女は普段と同じように、

用事は終わったからと少年に背を向けた。

「またいつでも……会えたら、遊んでね」

その気軽さが続く事が少女の願いで——

だから殊更、特別な別れは必要ないのだと。

そもそも今夜も、会いに来るつもりは本来

無かった少女は惜し気無く場から消えていき。

「——って、一人じゃ危ないよ、送るよ？」

くると少年が振り返った時は、少女の姿は

そこに無く。代りにあったのは——

「……あれ？ 悠夜君、何でここににいるの？」

「……」

少年がつい先程出て来た御所の、天才と名の

高い術師の子供は、子供がそこにいる理由を、

「……内緒。絶対教えないって事を条件に、

降りてきてくれたから」

「??」

それだけ言うと、フイと踵を返し。

ずっと気になっていた事……ある友人との

別れを、友人が望む形で終える事だけ手伝い。

——ありがと……悠夜くん——

それがどれだけ大きな救いであつたか——

瑠璃色の夜の空だけがきつと知っている。